

編集後記

昭和58年9月に K-3 型 VLBI システムが、ハードウェア・ソフトウェアともに完成すると同時に、システムの性能を確認する重要な実験が相次いで実施された。

同年10月の建設省国土地理院の筑波5mアンテナとのコヒーレンス確認試験、同年11月5日の歴史的な日米 VLBI 試験観測、そして翌年の昭和59年1月と2月には2回にわたる24時間連続の日米間でのシステムレベル実験が行われた。

これらはそれぞれ観測終了と同時に、大量の処理解析業務を伴ってきた。おびただしく発生する仕事の殆どが、初めて経験することばかりで、担当者全員にとって精神的にも肉体的にも苦しい日々が数か月にわたって続いた。

こうした条件の中で、この「K-3 型 VLBI システム開発特集号」の原稿の執筆が行われた。殆どの著者が数個の仕事について分刻みの並列処理（マルチタスク）を強いられた。こういった状況下では、書くべきテーマは見えていても、思うように筆が進まないという著者の声をしばしば聞かされた。しかし、これから先には更に、大規模な NASA との日米共同実験・国土地理院との国

内共同実験・米国海軍天文台との VLBI を利用した時刻同期実験などの長期的大実験が目白押しに待っており、ここで一旦システム開発の成果を論文としてまとめておかなければ、今後ますます書けなくなるであろうことも、多くの著者は理解していた。

この特集号は、こうした状況下で生まれたものである。

そして、K-3 型 VLBI システムが、チームワークのなかで完成にこぎつけたのと同様に、この特集号もまた、若井 登電波研究所所長・佐分利義和元総合研究官をはじめとする研究所幹部の方々の暖かい励ましの中で、担当者が等しく分担しあいながら、書き上げられたものである。

自画自賛であると、お叱りをいただくかと思いますが、この特集号に盛られた各論文の内容の高度さと総合性については、欧文の文献まで含めて比較して、他に例を見ない第一級のもものと自負している。

しかし一方、内容にふさわしい程度に原稿が十分に練り上げられたかどうかについては、読者の御評価に待つ以外はないであろう。

本特集号を手にした方々の厳しい御批判をお待ちしております。

(高橋富士信)

